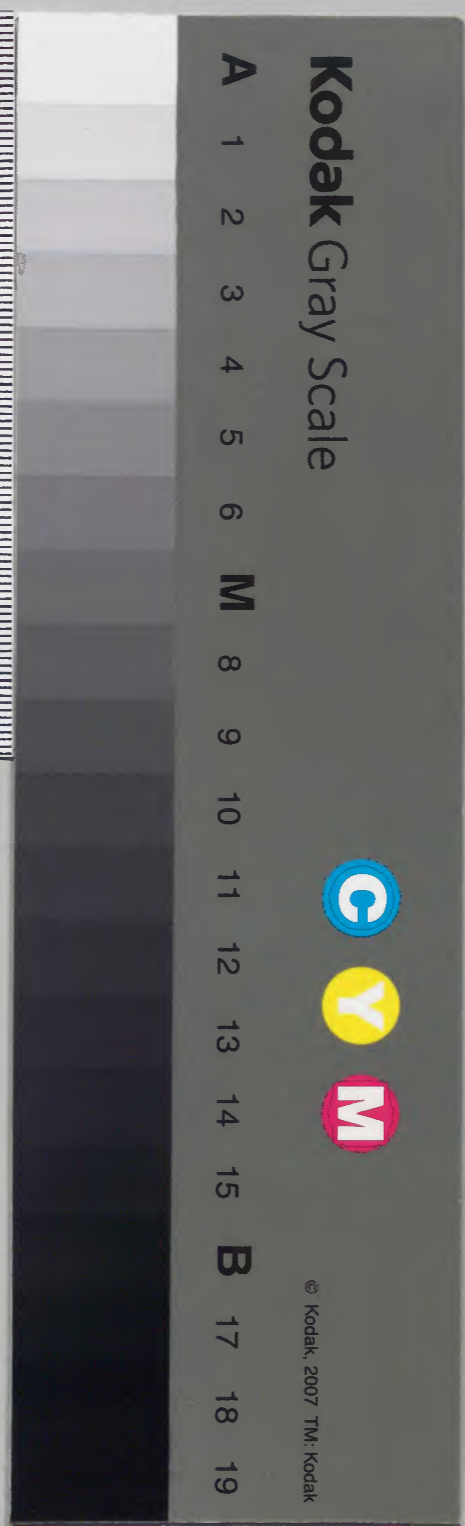
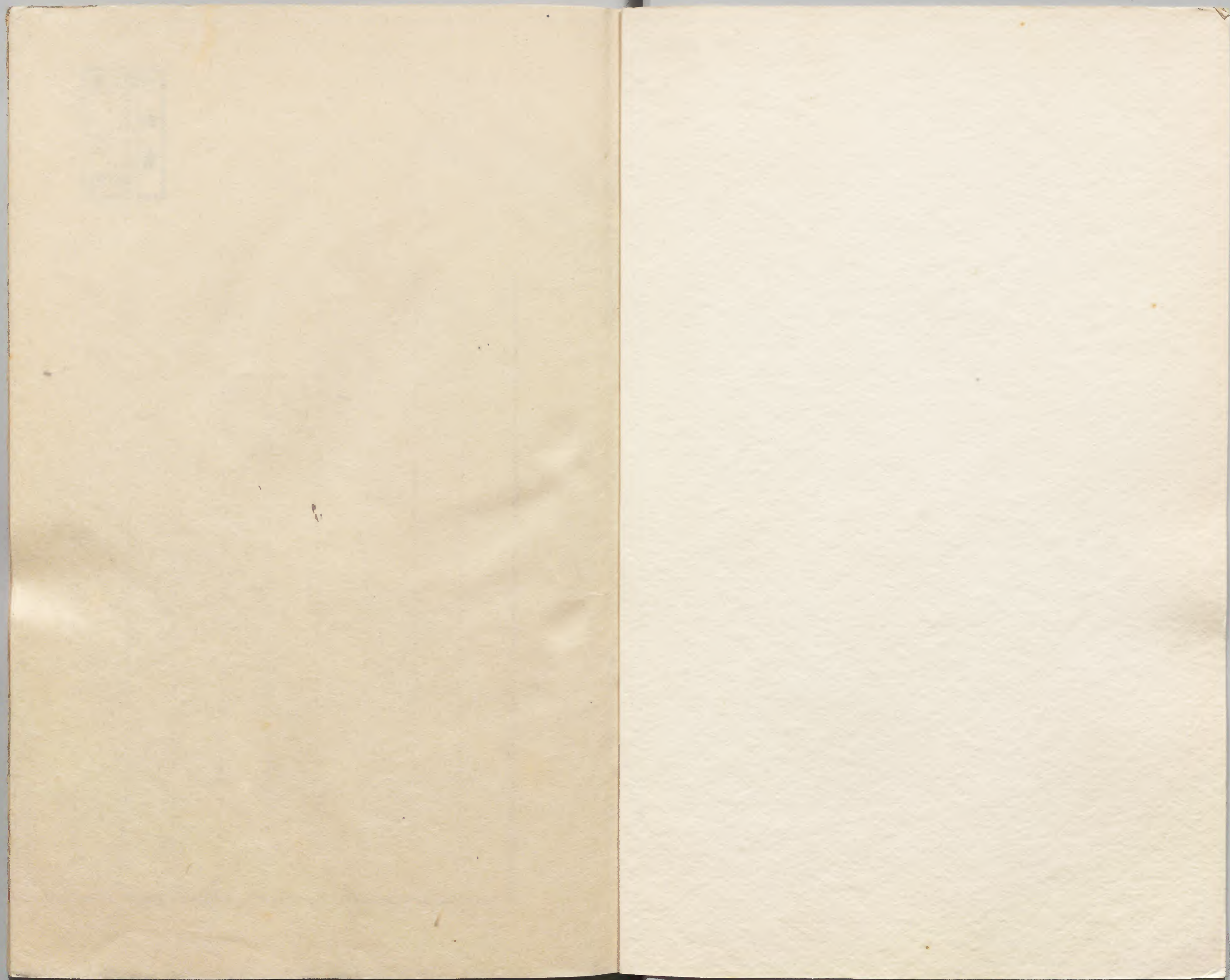


贈大政大臣岩倉公事蹟繪卷詞草案一

岩倉文書二二

内閣文庫		
番號	和	80629
冊數	122 ( 2 )	
函號	265	286





内閣文庫  
一三三冊  
八〇六二九号  
和書



贈太政大臣岩倉公事蹟繪卷詞草案

第一卷

明治復古ノ元勳前右大臣從一位大勳位贈太政大臣正  
 一位岩倉公具視ハ正三位具慶ノ子ナリ寶ハ前權中納  
 言堀河康親ノ二子文政八年九月十五日京都ニ生レ小  
 字ヲ周丸ト曰フ幼ニシテ正三位伏原宣明ノ門ニ入り學  
 ヲ受ク一日諸生盡ク講堂ニ登リ春秋左氏傳ヲ輪講  
 周丸獨リ諸生寮ニ在リテ中御門經之ヲ要留シ懷ヲ  
 探リテ象棋子ト方罫紙トヲ出シ與ニ對局センコトヲ求ム  
 經之其科業ヲ廢シ游戲ヲ為スコトヲ讓ム周丸笑ヒテ

曰ク春秋一部ノ大意ハ吾レ既ニ之ヲ領セリ區トシテ傳  
文ヲ解説シ注疏ヲ穿鑿スルカ如キハ徒ニ無用ノ勞ヲ為  
スノニ象棋ヲ以テ機ヲ闘ハシ智ヲ角スルノ愈レルニ若カク  
ト宣明聞キテ大ニ之ヲ奇トシテ曰ク此レ所謂ル渥洼ノ  
龍種ナリト宣明素ヨリ具慶ト善シ其子ナキヲ見周丸  
ヲ養ハンコトヲ勸メテ曰ク是兒舉止常ニ異ナリ必ス能ク  
子ヲ門ヲ大ニセント具慶大ニ悦ビ從三位錦織久雄ニ  
屬シ周丸ヲ其父康親ニ乞ハシメテ之ヲ養フ天保九年  
八月周丸岩倉氏ニ入ル當時ノ慣例ニ隨ヒ具慶ノ實子  
ト公言ス時ニ年十四ナリ岩倉氏ハ村上源氏ニシテ久我

密内符

氏ノ庶流ナリ始祖具堯ハ右大將後久我晴通ノ子

後陽成院天皇ニ事ヘテ正五位下ニ叙シ木工頭ニ任シ元

祿昇殿ヲ聽サレ家ヲ櫻井ト稱シ後ニ岩倉ト更ム是ヨ

リ世々堂上タリ具堯ノ玄孫權中納言恒具其子左兵

衛佐尚具ト 桃園院天皇ノ時並ニ近習ニ補ス

天皇ノ親臣權大納言德大寺公城久我敏通才名アリ丹

波ノ人竹内式部ニ學フ式部山崎闇齋ノ學ヲ奉シ大

義名分ヲ明カニスルヲ以テ主トス二人其教ヲ受ケ深ク

幕府ノ脅制攝家ノ驕僭ヲ憤リ同志ノ堂上ト陰ニ

大權ヲ 皇室ニ復スルノ策ヲ畫シ以テ之ヲ當ニ

先ツ君徳ヲ培養スヘシト是ニ於テ侍讀ヲシテ式部ノ  
學說ヲ以テ經筵ニ侍セシメ而シテ公城自ラ神代ノ卷ヲ  
進講シ專ラ闇齋ノ說ヲ用ケル關白近衛内前傳奏柳  
原光綱ノ言ヲ納レ神代ノ卷ノ進講ヲ停ム公城乃チ二三  
同志ト屢封事ヲ上ツリ 上ノ神道ヲ以テ志ヲ定メ  
攝家ノ動カス所ト為ラサランコトヲ請フ内前右大臣九  
條尚實内大臣鷹司輔平前關白一條道香等之ヲ聞キテ  
大ニ驚キ遂ニ謀反ト誣奏シ盡ク嚴罰ニ處ス凡テ二十  
人恒具父子其中ニ在リ時ニ寶曆八年二月ナリ後チ二  
年幕府慶事アリ上請シテ公城以下ノ罪ヲ寬宥ス

是歲恒具薨ス尚具辭官落飾シテ慰水ト號ス蓋シ關  
白ノ意ニ出ツルナリ安永七年 桃園院天皇十七回

ノ御忌ニ值ル關白尚實 旨ヲ奉シ寶曆ノ事ニ  
坐シ永蟄居ニ處セラレシ者ヲ免ス此時尚具年猶ホ壯  
ナリ尚實人ヲシテ之ニ謂ハシメテ曰ク若シ能ク過チラ悔  
ヒ罪ヲ謝シ誓書ヲ出タサハ復飾再官スルコトヲ得ント因  
テ切ニ之ニ從ハンコトヲ勸ム尚具堅拒シテ肯セス遂ニ家ニ  
卒ス 桃園院天皇ノ崩スルヤ尚具之ヲ聞キテ哀  
慟シ粒食ヲ絶スル者數日毎ニ忠孝ヲ以テ子孫ニ訓勵シ  
テ曰ク昔シ 後三條帝ノ攝籙ノ權勢ヲ抑削シ政

柄ヲ收攬スルヤ吾カモ祖  
右府贊襄スル所尤  
支流ノ家ニ生レ幸ニ  
寶曆聖帝ノ殊寵ヲ承ク因テ  
聊カ報效ヲ圖ル而シテ事敗レ身廢レ祖業ヲ紹キ先烈ヲ  
揚クルコト能ハス此レ終天ノ憾ナリ汝等能ク予カ言ヲ  
服膺シカラ竭シテ奉公シ村上源氏ノ聲ヲ塵カスコト勿  
レト尚具ノ孫右近衛權中將具選モ亦常ニ興復ノ計ヲ  
思フ名ヲ風流技藝ニ託シ廣ク四方ノ士人ニ接シ尊王懷  
慨ノ士上野ノ人高山正之ト布衣ノ交リヲ為シ深ク相ヒ  
結納ス 光格天皇ノ時正之ノ友志水周監ナル者緑毛

密所

龜ヲ琵琶湖ニ獲タリ正之以テ 天子文德ノ瑞  
ト為シ遂ニ 天皇 上皇ノ御覽ニ供シ請ヒテ

之ヲ 院中ノ池ニ放ツ乃チ具選ノ周旋スル所ナリ具  
選正之皆チ歌アリテ其事ヲ紀ス後チ具選疾ト稱シテ朝  
也ス形ヲ更ヘ服ヲ變シ偽リテ文人ト稱シ潛ニ京ヲ出テ、  
東游シ幕府ノ形情ヲ視察シテ還ル是ヨリ復タ家事  
ヲ治メス人以テ放蕩ト為ス遂ニ關白鷹司政熙ノ論奏ス  
ル所ト為リテ 勅勘ヲ蒙リ永蟄居ニ處セラレ落飾シ  
テ可汲ト號ス久シクシテ 朝廷慶事アルヲ以テ  
勅勘ヲ免カル具選ノ子權大納言具集人トシテ温良

忠實容儀端肅而シテ名分ヲ論スルコト尤モ崇テナリ嘗テ  
退 朝シ少シテ歸途ニテ鷹司輔熙ノ元服ヲ加ヘ昇  
殿ヲ聽サレテ衆 内スルニ遇フ具集輒チ衣冠ヲ攝ヘテ  
之ヲ禮ス輔熙ハ輿中ニ坐シテ肯テ禮セズ從者ヲシテ輿扉  
ヲ開カシムルコト僅ニ四五寸ノミ具集之ヲ家人ニ語り歎シテ  
曰ク予カ官階位賜彼レ童子ノ比ニ非ス而シテ彼レ攝家  
ノ權勢ヲ恃ニ無禮ナルコト此ノ若シ吾カ身言フニ是ラス其  
レ 朝廷ノ名爵ヲ若何ンセント具集ハ乃チ具慶ノ父ナ  
リ周丸岩倉氏ニ養ハルノ歳名ヲ具視ト命シ十月從  
五位下ニ叙シ十二月元服ヲ加ヘ昇殿ヲ聽サレ大夫ト稱

ス始メ大夫名ヲ撰ハンコトヲ其師宣明ニ請フ宣明具瞻  
二字ヲ書シテ之ニ與フ大夫瞻ノ字畫多クシテ書シ易  
カラサルヲ見以テ煩ト為シ之ヲ易ヘンコトヲ欲ス宣明乃チ  
ヤフルニ視ノ字ヲ以テセシト云フ明年正月大夫始メテ  
出番ノ 命ヲ承ケテ 禁中ニ更直シ方領米ヲ受ク  
是時祖父具集猶ホ在リ大夫時其燕居ニ侍ス談  
本朝ノ歴史ニ及ヒ鎌倉開府以後ノ事ニ至ル毎具集  
輒チ大息シテ曰ク嗟大權何レノ時カ 皇室ニ復セン  
ヤト一日詳ニ大夫ニ語ルニ寶曆ノ事ヲ以テシ因テ之ヲ  
勵マシテ曰ク汝チ若シ乃祖ノ志ヲ繼クコト能ハスハ吾カ子孫



ニ非スト大夫感奮シ泣下リテ禁スルコト能ハサルニ至ル大  
夫ノ 王政復古ノ志ヲ立ツル蓋シ此時ヲ以テ始メト  
ス時ニ年十六ナリ

第二卷

嘉永六年六月米國水師提督彼理戰艦四艘ヲ率ヒ  
テ浦賀ニ来リ國書ヲ幕府ニ致シ和親貿易ヲ要求ス  
是ヨリ先キ 朝廷外船ノ屢近海ヲ往来スルヲ以テ不  
虞ノ禍アリテ 國體ヲ傷ランコトヲ慮リ幕府ニ論  
シテ兵備ヲ嚴ニセシム幕府以テ意ト為サス是ニ至リ狼狽  
措ク所ヲ知ラス彼理ニ諭シテ且ツ還ラシム彼理明年再ヒ

至ランコトヲ約シテ去ル彼理ノ来ルヤ幕府所司代脇坂  
安宅ヲシテ之ヲ 朝ニ奏セシメ又諸侯ニ令シテ事宜ヲ  
議セシム 上 神宮以下七社仁和寺以下七寺ニ  
詔シテ速ニ夷類ヲ攘シ 國體ヲ全ウセンコトヲ祈ラシム而  
シテ諸侯ノ議モ亦多ク戰ヒヲ主トス明年彼理果シテ復  
夕至ル浦賀ヨリ本牧ニ入り去歲ノ報ヲ得ンコトヲ求ム戰  
艦六艘兵勢頗ル盛ナリ幕府大ニ惧レ吏ヲシテ彼理ト  
横濱ニ會議セシメ遂ニ米國ノ漂民ヲ懇待シ船中必需  
ノ物ヲ賣與シ、田函館二港ヲ開クノ三事ヲ許ス己ニ  
シテ米國領事ノウンセントハルリスヲ遣ハシテ毎夕交際

貿易ヲ求メシ 幕府遂ニ其請ヒテ允シテ將<sub>レ</sub>卑ニ謁セ  
シメ尋テ日米假條約案十四條ヲ議定シ交際貿易  
及ヒ下田函館ノ外更ニ次ヲ以テ神奈川長崎新潟兵庫  
江戸大阪諸港ヲ開クコトヲ約スルヲ以テ主トス時ニ安政  
四年十二月ナリ明年二月幕府老中堀田正睦ヲシテ  
勘定奉行川路聖謨目付岩瀬忠震等ヲ率ヒテ西上シ  
假條約案ヲ奏セシム 上其事ノ重大ニシテ 國  
體人心ニ關スルヲ以テ深ク之ヲ憂ヒ幕府ニ 勅シテ  
更ニ尾張紀伊水戸三家及ヒ諸侯ニ下シテ議シ具狀奏  
上セシム幕府肯テ其議ヲ下サス正睦ヲシテ奏セシメテ

曰ク人心ノ如キハ幕府必ス之ヲ鎮定セン願クハ 聖慮  
ヲ勞スルコト勿レト正睦必ス允可ヲ得ント欲シテ百方カラ  
盡シ人ヲシテ密ニ關白九條尚忠ニ説キ己レヲ右ケシム三  
月尚忠 勅旨案ヲ奏シ奉行センコトヲ請フ其案ノ大  
意幕府苟モ能ク人心ヲ鎮セハ 聖意且ツ安シ外事措  
置唯幕府ニ是レ賴ルト謂フニ在リ是ニ於テ尊融親  
王親町三條實愛<sub>後嵯峨</sub> 衛忠熙右大臣鷹司輔熙内大臣三條實萬等  
ヲ召シ尚忠ト廷議セシム議イマタ決セス是時大夫從四位  
上侍從ヲ以テ近習ニ充ツ尚忠ノ議ヲ聞キ驚キテ曰ク  
此議果シテ用ナラレハ大事去ラント是ニ於ニ正三位大

正親町三條實愛<sub>後嵯峨</sub>

衛忠熙右大臣鷹司輔熙内大臣三條實萬等

貿易ヲ求メシ 幕府遂ニ其請ヒテ允シテ將<sub>レ</sub>卑ニ謁セ  
シメ尋テ日米假條約案十四條ヲ議定シ交際貿易  
及ヒ下田函館ノ外更ニ次ヲ以テ神奈川長崎新潟兵庫  
江戸大阪諸港ヲ開クコトヲ約スルヲ以テ主トス時ニ安政  
四年十二月ナリ明年二月幕府老中堀田正睦ヲシテ  
勘定奉行川路聖謨目付岩瀬忠震等ヲ率ヒテ西上シ  
假條約案ヲ奏セシム 上其事ノ重大ニシテ 國  
體人心ニ關スルヲ以テ深ク之ヲ憂ヒ幕府ニ 勅シテ  
更ニ尾張紀伊水戸三家及ヒ諸侯ニ下シテ議シ具狀奏  
上セシム幕府肯テ其議ヲ下サス正睦ヲシテ奏セシメテ

曰ク人心ノ如キハ幕府必ス之ヲ鎮定セン願クハ 聖慮  
ヲ勞スルコト勿レト正睦必ス允可ヲ得ント欲シテ百方カラ  
盡シ人ヲシテ密ニ關白九條尚忠ニ説キ己レヲ右ケシム三  
月尚忠 勅旨案ヲ奏シ奉行センコトヲ請フ其案ノ大  
意幕府苟モ能ク人心ヲ鎮セハ 聖意且ツ安シ外事措  
置唯幕府ニ是レ賴ルト謂フニ在リ是ニ於テ尊融親  
王左大臣近衛忠熙右大臣鷹司輔熙内大臣三條實萬等  
ヲ召シ尚忠ト廷議セシム議イマタ決セス是時大夫從四位  
上侍從ヲ以テ近習ニ充ツ尚忠ノ議ヲ聞キ驚キテ曰ク  
此議果シテ用ナラレハ大事去ラント是ニ於ニ正三位大

原重徳ト謀リテ曰ク關白ノ議必ス堀田ノ為サシムル所ニシテ謀主ハ川路岩瀬ナラン謀主ヲ制伏セハ事自ラ止マント遂ニ往キ二ノ一ニ説キテ其計ヲ止メシメ可カサレハ死ヲ以テ事ヲ決センコトヲ約ス約己ニ定ル十一日夜侍従往キテ議奏久我建通ヲ見託スル所アラント欲ス 上尚忠ノ議 上ノ意ニ非ス尊融親王等モ亦之ヲ争ヒ而シテ尚忠固執シテ動カス勢ヒ將ニ可セサルヲ得サラントスルヲ以テ之ヲ患ヒ密ニ建通ニ 勅シテ之ヲ計ラシメ建通侍従及ヒ大納言中山忠能中納言嵯峨實愛大原重徳ト謀ラント欲シ使ヲ遣ハシテ之ヲ招キ使者イマタ

返ラサルニ會フ建通侍従ノ至ルヲ見大ニ喜ヒテ計ヲ問フ侍従具サニ語ルニ謀ル所ヲ以テス建通曰ク事急ナリ幕吏ニ説クニ暇アラス之ヲ為スコト奈何セント侍従曰ク然ラハ則チ諸同志衆 内シ多衆ヲ以テ關白ヲ動カスコト有ランノミト忠能實愛重徳モ亦相ヒ踵キ至ル皆ナ侍従ノ言ヲ善トス侍従曰ク若シ譴怒ヲ被ラハ請フ其罪ニ當ラント重徳モ亦之ニ當ランコトヲ請フ是ニ於テ急ニ書ヲ同志ノ堂上ニ移シ明朝ヲ以テ 内ニ衆集セシム詰旦集ル者八十八人乃チ 勅旨案ヲ改メンコトヲ乞フノ書ヲ為リテ之ニ連署シ尚忠ヲ見テ之ヲ上ツラント欲ス而

シテ尚忠朝セス遂ニ傳奏廣橋光成ニ属シ之ヲ尚忠ニ  
致サシメテ退キ直ニ尚忠ノ第ニ抵リ見シコトヲ求ム尚  
忠疾ト稱シテ見ス衆己ムコトヲ得ス命ヲ將フ者ヲシ  
テ其意ヲ尚忠ニ言ハシメテ去ル明日又皆ナ衆 内シ  
光成ニ就キ前日ノ報ヲ聞カンコトヲ求ム光成曰ク關白  
子等ノ議ヲ奏ス 上嘉納シ 勅シテ前案ヲ更メ  
シムト衆乃チ感謝シテ退ク廿二日 詔シテ 勅旨  
ヲ正睦ニ下シ幕府ニ傳ヘシム其略ニ曰ク墨夷ノ事  
國家ノ安危ニ係リ實ニ 神州ノ大患ナリ今若シ家  
康以來ノ良法ヲ變更スルコトアラハ上ハ 神宮ヨリ下ハ

關國ノ人心ニ及ヒ關スル所重大ニシテ治安保チ難シ  
聖意深ク之ヲ憂フ且ツ往年下田開港ノ條約既ニ輕事  
ニ非ス今又假條約ノ如クナルトキハ 國威立タス群臣ノ議  
モ亦以テ 國體ヲ傷リ後患測リ難シト為ス宜ク更ニ三  
家及ヒ諸大名ニ命シテ之ヲ議セシムヘシト正睦奏ス墨夷  
ノ事既ニ議定スル所ナリ今一ニ 勅旨ニ遵ハント欲スルトキハ  
恐クハ紛紜ヲ致サン則チ將ニ便宜事ニ從ハサルヲ得サラン  
トスト 上終ニ可セス有司ヲシテ三事ヲ幕府ニ下シ衆議  
ヲ採リ奏上セシム且ツ曰ク奏上ノ議若シ 聖意疑フ所  
ノ者アラハ將ニ決ヲ 神宮ニ仰カントスト三事ハ一ニ曰ク永

世安全ノ計以テ 聖神ヲ安ニスヘキ者ニ曰ク 國體ヲ  
全クシ後患ヲ防グノ方略ニ曰ク下田條約ノ外皆ナクサレ  
サルトキハ事變固ヨリ測リ難シ防禦ノ處置如何ント米艦  
ノ始メテ至ルヤ關白鷹司政通堂上ニ諭告スル所アリ侍從  
以為ラク 國家必ス是ヨリ多事ナラン宜ク人才ヲ養ヒ  
以テ之ニ應スヘシト侍從素ヨリ歌ヲ學フヲ以テ政通ノ家  
ニ出入ス是ニ於テ政通ヲ見文武校ヲ興シ堂上ノ子弟  
ヲ教ヘンコトヲ請フ政通之ヲ善トシ人ニ語りテ曰ク岩倉  
侍從目光炯ミトシテ辯舌流ルカ如シ真ニ濟世ノ器ナリト  
是ヨリ侍從心ヲ國事ニ用キ大ニ夙志ヲ伸ヘンコトヲ思フ是

ニ至リ遂ニ列參ノ事アリ列參ノ後數日侍從疾ヲ移シテ  
閑居スル者十餘日以テ物議ヲ避クルト云フ

### 第三卷

侍從嘗テ權中納言庭田重胤左少將千種有文ト散樂  
ヲ野村某ノ家ニ觀ル偶典藥寮醫師安藤某隣席ニ  
在リ樂畢ルニ及ヒ侍從等三人ヲ其家ニ邀ヘテ之ニ觴ス談  
是日觀ル所張良ノ技ニ及フ侍從曰ク彼レ黄石公ナル者恐  
クハ相者ナラン然ラサレハ馬シノ能ク一見シテ張良ノ人傑夕  
ルヲ知ランヤト重胤曰ク吾カ從者某年猶ホ少シ然レト  
モ善ク人ヲ相スト因テ古シ至リ遍ク座中ヲ相セシム某

相シテ侍從。至リ曰ク公ノ相惡多クシテ善少シ然レトモ  
其善ナル者惡ナル者ニ剋ツトキハ大吉ナリ且ツ公今恐クハ  
大計ヲ規畫スルコトアラン而シテ頼ル所ノ人東北ニ在リ故  
ニ成リ難シ若シ西南ノ人ニ頼ラハ事必ス成ラント京都ニ  
人ノ生年月日時ヲ以テ一生ノ吉凶ヲ占フ者アリ侍從ノ  
從祖ニ父僧ノ請翁嘗テ侍從ノ為ニ其占ヲ問フ占者驚キ  
テ曰ク吾レイマタ是ノ若キ人ヲ見ス賤者タラハ多衆ノ首  
領貴者タラハ天下ノ政ヲ執ル者ナラント後チ其言占白ナ  
驗アリ



